



学校だよりNO40

令和4年 2月10日

児童数 473人

薫っ子



文責 校長 古川 次男

冬季オリンピック あれ・これ

「とんだ～、きまった。見事なジャンプ!」「ふな・き～っ」覚えていらっしゃる方とは、話が合いそうな気がします。

1972年の札幌オリンピックで、笠谷幸生氏が70メートル級ジャンプで金メダルを取りました。今は、ノーマルヒルと呼ばれる競技ですが、当時は70メートル級という名称でした。この時は、銀メダルを金野昭次氏、銅メダルを青地清二氏が獲得し、日本人が表彰台を独占し、「日の丸飛行隊」と呼ばれ、子どもたちはこぞってミニスキーを履いてジャンプのまねごとをしていたものです。「とんだ～、きまった。見事なジャンプ!」は、たぶんその時の実況中継をしたアナウンサーの言葉だったと思います。

時はうつって、1998年の長野オリンピック。スキージャンプの男子団体ラージヒル。「ふな・き～っ」は、個人のラージヒルで金メダルを取っていた舟木和喜の最終ジャンプでの原田雅彦氏の言葉です。実は、その前のリレハンメルオリンピックで2位ドイツに大差をつけていて最終ジャンパーとして登場したのが原田氏でした。普通にとべば金メダル間違いなしの状況で、プレッシャーを受けた原田氏のジャンプは明らかな失敗ジャンプ。銀メダルに終わりました。その当時の思いがよみがえったのか、金メダル目の最終ジャンパーとしての舟木氏を思って、うめき声のようにつぶやいたのが「ふな・き～っ」でした。結果は、プレッシャーに負けずにとびきった舟木氏のおかげで金メダルを獲得し、日本中がその喜びに酔いしれるとともに、原田氏の4年分の思いを共有した瞬間でした。

時は流れ、現在、北京オリンピックの真っ最中。日々、テレビにかじりついておられる方も多いのではないのでしょうか。東京オリンピックが終わったばかりで、野球やソフトボールを始めとした多くの競技で日本が金メダルを獲得し、その興奮がまだ収まっていないうちに、北京での冬季オリンピックが開催されるなんて、スポーツ好きにはたまらない年になりましたね。

今回も、期待通りの活躍をする小林陵侑選手を始めとする日本選手の活躍に目が離せません。そのような中、「こんなはずではなかった」と思えるような選手がいることも、また、スポーツの残酷さでしょうか。

スキージャンプの高梨沙羅選手は、個人種目で4位となり惜しくもメダルに届きませんでした。さらに、新種目の混合団体では1回目に103メートルという大ジャンプをとびましたが、スーツの太もも回りが2センチ大きかったとして規定違反で失格となってしまいました。なんという、悲劇でしょうか。4年間がんばって練習してきて、チームのために素晴らしいジャンプをしたのに、規定違反で失格とは残念でなりません。

薫っ子も、日々自分の目標に向かってがんばっています。その努力が、報われるといいなと思いながら、オリンピックを見ています。